

夜の終りに (1961)

NIEWINNI CZARODZIEJE

LES INNOCENTS CHARMEURS [仏]

INNOCENT SORCERERS [米]

メディア 映画

ジャンル ドラマ 青春

製作国 ポーランド

色彩 B&W

時間 87分

初公開日 1963/06/23

公開情報 新外映

【解説】

「二十歳の恋」の中でもワイダの挿話が群を抜いて良かったが、これも同じく、青春の日常を描いて、的確な描写力と遊び心を共に発揮し心憎いばかりだ。ドラムを始めて3年目というバジリ（ウォムニッキー）は昼間は体育協会付きのスポーツ医。荒くれボクシング部の学生たちの健診を行なって、おもむく先はナイトクラブだ。今晚は友人エディック（チブルスキー）の代わりに叩くのである。友は彼を出迎えながら客席の中の少女を指さす。イカす娘だ、帰りに誘っていけ、と。彼は本当にそうした。終電の時間を気にする彼女ペラギア（スティプウコフスカ）に駅まで付き合うが、彼女は直前にくびすを返し、彼の部屋まで着いてきた。最初は即物的に情事に至る段取りなど紙に箇条書きして、その通りにキスまでしてみるが、何となくバカバカしくなると、マッチ箱を使ったゲームで日本で言う“野球拳”のようなことをしたり、いり卵を作ってウォッカを呷っては哲学談義などして夜を明かしてしまう。バジリが先に寝入って目を覚ますと彼女はいない。彼はたまたま、バイクで町中を探し回る（その時に会う仲間の一人にロマン・ポランスキーの姿がある）。が、発見できず、とぼとぼ部屋に帰ると、彼女は散歩に行っていたのだと、戻っていた。彼がなに喰わぬ顔で再び眠ろうとするので、彼女はまた出ていこうとするが、バジリはサヨナラとしか言わない。しかし、その表情は人恋しさに沈んでいる。と、一旦、外に出たペラギアはそっと扉を開けて中に入っていくのだった。当時のポーランドの若者の置かれた状況などに無関心でも、共感できるに違いない。いつの時代、どこの国にあっても通ずる普遍的な青春の掌編である。

【クレジット】

監督	アンジェイ・ワイダ	Andrzej Wajda
脚本	イエジー・アンジェウスキー	Jerzy Andrzejewski
	イエジー・スコリモフスキ	Jerzy Skolimowski
撮影	クシシュトフ・ヴィニエヴィチュ	Krzysztof Winiewicz
音楽	クリシトフ・コメダ	Christopher (Krzysztof) Komeda
出演	クデウィシュ・ウォムニッキー	
	ズビグニエフ・チブルスキー	Zbigniew Cybulski
	クリスティナ・スティプウコフスカ	
	アンナ・チェピエレフスカ	Anna Ciepielewska